

新品種の可能性を開花させるもの

農研機構北海道農業研究センター 寒地畑作研究監
兼畑作物開発利用研究領域長

よしなが まさる
吉永 優

茨城県のJAなめがた甘藷部会連絡会が日本農業賞大賞（集団組織の部）に輝いた。行方産サツマイモのブランド化と地域活性化を目指した意欲的な取り組みが評価された結果であろう。JAなめがたと言えば、焼きいもブームの火付け役であり、スーパーやコンビニ等における焼きいも機を使用した店頭販売の先駆けでもある。焼きいものおいしさを引き出すための最適な原料生産、貯蔵法や焼き方を追求し、積極的に試食販売を行って焼きいもの魅力を消費者にアピールした。

JAなめがたの戦略は、品種の能力を最大限に活かすことにあったと思う。東の「ベニアズマ」（1984年育成）、西の「高系14号」（1945年育成）と言われる2大品種が各産地の「サツマイモ」として売り場に並ぶ状況下で、管内の主力品種「ベニアズマ」に加えて、新品種「べにまさり」（2001年育成）をいち早く採用した。その後「べにはるか」（2007年育成）も取り入れて、3品種リレー出荷体制を確立した。また、おいしい焼きいもを作るための技術情報をパンフレットにして発信した。そこにはサツマイモのブランド化に取り組む関係者の熱意と自信が感じられたことを覚えている。

こうした取り組みの裏には多くの苦労があったと聞いた。例えば「べにまさり」は、

いもの萌芽がクレームとなって出荷先から大量の返品があった。困り果てた末、返品を焼きいもにして配ったところ、最適に糖化した「べにまさり」のおいしさが格別であることに気づいたという。これをきっかけに焼きいものおいしさを追求し続けたが、その原動力となったものは何だったのか。産地や市場の閉塞感を打破して、生産者や地域を豊かにしたいという願いか。消費者に本当のサツマイモのおいしさや魅力を伝えたいという思いだったのか。いずれにしても新品種の可能性を大きく開花させたものは、品種の魅力に引きつけられた人々の熱意と創意工夫であったことは間違いない。

各地で行われてきた同様の取り組みは、人々のサツマイモへの関心を高め、需要の喚起や生産意欲の向上等に貢献した。一昔前ならば、人々が好みの焼きいも品種、熟成の必要性や焼き方等について詳しく語る姿を目にすることはなかったであろう。人々のサツマイモに対する見方や消費動向を大きく変えた点において、近年は、サツマイモ史上一つの節目となる時代と言えるのではないか。その先駆けとなったJAなめがたの今回の受賞を北海道の地からお祝いするとともに、2大品種が君臨するバレイショの世界においても新品種の可能性を大きく開花するような取り組みを期待している。